

## 「ゲツセマネの祈り」

マルコの福音書 14:32~42

### はじめに

最期の晩餐とも呼ばれる、イエシュアと弟子たちの過ぎ越しの食事が終わり、場面はゲツセマネへと移ります。イスカリオテのユダ、そしてすべての弟子たちの裏切りによって、ここでついにイエシュアは捕らえられてしまうこととなります。それを前にして、苦しみもだえながら祈るイエシュアと、それとは対照的に眠りこけてしまう弟子たちの姿が描かれた場面が今日の箇所です。文中でイエシュアが弟子たちに対して「一時間でも目を覚まして（祈れないのか）」と言われる箇所があるのですが、これを読むと何やらグサグサと心に刺さるものがあるのは、私だけではないでしょう。「毎日最低一時間は祈りましょう」という、そんな命令がここには示されているのでしょうか。では今日もヘブル語の視点から、神のご計画の観点からこれを読み解いてみたいと思います。

### 1. ゲツセマネ

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:32 さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」

イエシュアは弟子たちを連れて「ゲツセマネ」という場所に来られました。「搾油機（場）」という意味のこの場所は、その名のとおりオリーブの木の実からオリーブ油を搾り取るための場所でした。イエシュアはなぜこのような場所を選ばれたのでしょうか。それはこの場所が単に祈ったり静まったりするのに適した場所だったからでしょうか。そうかもしれませんが、この「ゲツセマネ(גֶּטְסֵמָנֶי) 」という名には重要な神のご計画が指し示されているのです。この名には「(オリーブ) 油、脂」という意味のシェメン(שֶׁמֶן)という言葉が含まれているのですが、その最初の言及は以下のものです。



創世記【新改訳 2017】

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが誓願を立てて言ったものですが、彼が眠っているところに神である主が語られ、その頂が天に届き、御使いたちが上り下りしている、地に立てられた一つのはしごを見させ「わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される（創世記 28:13~14）。」と約束されました。これに対するヤコブの上記の応答の中に、聖書で最初の「油」シエメンが使われているのです。彼はこれを自分が枕にして眠った石の柱に注ぎ、「ベテル」すなわち「神の家」と呼びました。このようにシエメンとは本来、神のイスラエルに対する約束、まぼろし、ご計画が実現する「神の家」がこの地上に建てられるということを示す言葉なのです。そしてそれはただ降り注ぐようなものでも、下から湧いてくるようなものでもなく、まさに搾り出されるもの、すなわち踏みつけられ、すりつぶされ、打ち砕かれるような工程を経て現れるものであることがこの「ゲツセマネ」という名には表されており、次に記されているイエシュアの姿、言動にもそれを見ることができます。

## 2. 取り去ってください

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、

14:34 彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにおいて、目を覚ましていなさい。」

14:35 それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。

14:36 そしてこう言われた。「アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」

イエシュアは弟子たちの中からペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて行かれ、ご自分は「深く悩み、もだえ始め」られたとあります。ここには二つのヘブル語が使われています。一つはシャーマーム (סָחַח)で、これは本来、土地が「荒れる」こと、大飢饉により地が荒廃し、人々が飢えて死んでいくさまを示す言葉です（創世記 47:19）。そしてもう一つはムグ (מוּג)で、これは本来、「カナン人」に象徴される、異教の神々の国、すなわちイスラエルの神を神としない国の民が「溶け去る、消え去る」滅ぼされるということを表した言葉です（出エジプト記 15:15）。さらにイエシュアはここで死ぬほどの「悲しみ」があるとも言われています。ここにはマラー (מָרָה)という言葉が使われており、これは本来、「神に（逆らう）」という意味の言葉なのです（民数記 20:10）。つまりここでイエシュアはイスラエルの神である主に逆らう者、主の前に罪ある者たちおよびそのような国々の民の姿をご自分の中に表しておられるのです。まさに世の罪をその身に背負い、ほふられる子羊（ヨハネ 1:29）となられるイエシュアの姿がここに表されているのです。

そしてそのような状態の中でイエシュアは「取り去ってください」という同じ祈りを、三度繰り返しておられます。ここにはアーヴァル(אָרַב)という言葉が使われており、この言葉は本来、「地の上を通り過ぎる、地上から退く」という意味を持った言葉です(創世記 8:1)。イエシュアのこの祈りが指し示す、地上から三度、取り去られる、退けられるものとは何でしょう。それは先に述べた「神の家」また「祈りの家(イザヤ 56:7)」とも呼ばれるエルサレム神殿のことです。かつてソロモン王によって建てられ、バビロンによって破壊され、後にゼルバベルによって再建され、そしてローマによって破壊されたエルサレムの神殿は、やがてもう一度再建されます。しかしそれも「荒らす忌まわしいもの」、獣と呼ばれる反キリストに奪われてしまうことを、イエシュアはここに指し示しておられるのです。ですからここでのイエシュアの祈りは、決して十字架の苦しみを目前にして、恐れおののくことから出たものではなく、「神の家」がどのような工程を経て建てられるのかという神のご計画、まさに父なる神「がお望みになることが行われ」る、ということを表したものであるということです。

### 3. 眠っている

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:37 イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、ペテロに言われた。「シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。」

14:38 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」

14:39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。

14:40 そして再び戻って来てご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたがとても重くなっていたのである。彼らは、イエスに何と言ってよいか、分からなかった。

イエシュアの三度の祈りに対し、三人の弟子たちは三度の「眠り」で応えています。これはイスラエルの民、ユダヤ人たちの霊的な目の「まぶたがとても重くなって」いること、霊的盲目性を表した「型」です。それはすなわちイエシュアを神の御子メシアとして認めない、受け入れられないということです。この彼らの霊的に「眠っている」という状態、今日もなお続くユダヤ人の霊的盲目性は、詩篇に記された以下の預言を指し示しています。

詩篇【新改訳 2017】

127:1 【主】が家を建てるのでなければ建てる者の働きはむなしい。【主】が町を守るのでなければ守る者の見張りはむなしい。

127:2 あなたがたが早く起き遅く休み労苦の糧を食べたとしてもそれはむなしい。実に主は愛する者に眠りを与えてくださる。(別訳:眠っている間に、このように備えてくださる。)

弟子たちの眠りが指し示す、ユダヤ人たちの霊的盲目性、それは「【主】が家を建て」られるためです。人の手によってではなく、主であるイエシュアご自身が建てられ、そして守られる家こそがまことの「神の家」なのであり、そうでないならばそれはむなしい、偽りであると記されているのです。ちなみにこの詩篇で「見張り」と訳されているシャーカド(שָׂרְקָד)はイエシュアが弟子たちに「目を覚まして…いなさい」と言われた箇所でも使われています。つまり、ここでたとえ弟子たちが目を覚ましていたとしても、その

「見張りはむなしい」ものであったと言えるでしょう。だからこそ神はこの時の弟子たちに対して、「実に主は愛する者に眠りを与えてくださ」ったのです。ちなみにこの「眠り」と訳されるシェーナー(הַנִּשְׁן)が聖書で最初に使われた箇所は、先に取り上げた創世記 28 章で「28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った」という箇所になります。ですから三人の弟子たちに与えられた三度のシェーナー「眠り」には、神がイスラエルに約束された「神の家」のご計画が指し示されているのであり、決してふがない弟子たちの醜態を晒すために記されたものではないということです。

#### 4. 渡される

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:41 イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。

14:42 立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」

イエシュアはここで「もう十分です。時が来ました。見なさい。」と言われました。神のご計画は「三度目」のエルサレム神殿が建てられ、そしてそれが荒らされる時、ついにそのクライマックスを迎えます。それはもちろん、イエシュアが反キリストを滅ぼすために、神殿を奪い返すために天から下って来られる、イエシュアの地上再臨です。ここでは「人の子は罪人たちの手に渡されます」となっており、イエシュアが捕らえられてしまうことが記されているのですが、ここで「渡されます」また「裏切る」という箇所に使われているマーサル(מָרַס)は本来、このような御言葉として用いられました。

民数記【新改訳 2017】

31:1 【主】はモーセに告げられた。

31:2 「あなたは、イスラエルの子らのために、ミディアン人に復讐を果たせ。その後で、あなたは自分の民に加えられる。」

31:3 そこでモーセは民に告げた。「あなたがたのうち、男たちは戦のために武装せよ。ミディアン人を襲って、ミディアン人に【主】の復讐をするためである。

31:4 イスラエルのすべての部族から、部族ごとに千人を戦に送らなければならない。」

31:5 それで、イスラエルの分団から、部族ごとに千人、すなわち、合計一万二千人の、戦のために武装した者たちが選ばれた。

31:6 モーセは部族ごとに千人を戦に送った。また彼らとともに、祭司エルアザルの子ピネハスを、聖なる用具と吹き鳴らすラッパをその手に持たせて、戦に送り出した。

31:7 彼らは【主】がモーセに命じられたとおりに、ミディアン人に戦いを挑み、その男子をすべて殺した。

これは神が命じられた「イスラエルの子らのために… (主の) 復讐を果た」すという戦いについてのものです。その「戦のために武装した者たちが選ばれた。」という箇所に聖書で最初のマーサルがあります。つまり「人の子は罪人たちの手に渡されます」という御言葉には、これとは全く逆の意味の「人の子はイスラエルのために、罪人たちに復讐を果たされる」という神のご計画が秘められているのです。続いて言

われた「**立ちなさい**」という箇所に使われているクーム(קוּם)という言葉も、単に立つ、立ち上がるという意味ではなく、本来は「襲いかかって(殺す)」という意味の言葉なのです(創世記 4:8)。

このように、イエシュアはやがて地上に再臨されます。それはイスラエルをそそのかし、彼らの神殿を奪い、そしてこれを「荒らす忌まわしいもの」である獣、反キリストとこれに従うすべてのものに対する復讐を果たすためです。そしてその鍵を握るのが、やがて三度目に建てられるエルサレム神殿であることが今日の箇所には表されていました。

## 5. 目を覚ましていなさい

神が世の終わりになそうとしておられるご計画について、今日も語らせていただきました。昏迷の時代にあって、今私たち教会は、ますますこの事実を発信していかなければなりません。いやそのように召されているのです。今日の箇所の中でイエシュアは「**目を覚ましていなさい**」という言葉もまた三度繰り返しておられました。ヘブル語でシャーカド(שָׂרָקָד)というこの言葉は意外にも本来は「アーモンド(あめんどう)の花」を指す言葉なのです。しかし実際の植物としてのそれを指すのではなく、それを象った「燭台」を指す言葉です(出エジプト記 25:33)。その「燭台」は、幕屋、神殿の聖所の中に置かれ、窓のないその内部を照らす唯一の光として用いられました。その燃料として用いられたのが、先のゲツセマナの箇所でも取りあげたオリーブ油です。イエシュアは明らかにこのオリーブ油で燃える幕屋の「燭台」を意識してこの言葉を使っておられます。そしてヨハネの黙示録において、イエシュアは私たち教会のことを「燭台」と呼んでおられます(ヨハネの黙示録 1:19)。ですからイエシュアは教会に対し、聖所を照らす光、灯りであれ、と言っておられるのです。聖所の中を照らす灯りですので、広く遠くを照らすものではありません。門をくぐり、祭壇や洗盤のある大庭を通り、さらに狭い入り口から聖所に入る者、祭司たち、すなわち神がお選びになった者たちを照らす光、それが教会の役割であると信じます。その聖所の中に照らし出されるもの、明らかにされるものとは、外からは決して見ることでできない、隠された神の奥義、すなわち神のご計画です。教会とは本来、これを解き放つ、発信する唯一の存在として召されているのです。ですからどうか主がこれからもこの教会をますますそのようにして用いてくださるようにと祈ります。ともに祈ってまいりましょう。

